



校訓 希望 友愛 克己

～ これからは、いつもと違う？ ～

校長 富士 篤也

いつもと違う夏休み、中学生である、皆さんは、どんな風に過ごしたでしょうか？現在までのところ、大きな事故等の発生はありません。皆さんが注意をし、健康で安全に生活してくれたおかげです。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、一学期は休校、部活動の総体、コンクール等が中止等になりましたが、代替の大会が行われた競技もありました。それぞれの部活動で、必死にスポーツや音楽に打ち込む姿が見られました。完全ではないにしても、「新しい生活様式」を取り入れながら、徐々に学校の日常が戻りつつあります。

学校では、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、教育委員会、地域、教職員で、二学期以降の行事等をどのようにしようかと検討をしています。

二学期スタート後の行事として、「体育大会」がありますが、「新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、体育大会を行うのは難しいのではないか」といった安全面を重視する意見もありました。しかし「①3年生の大きな思い出の一つである。②異学年で活動する良さがあるなどのプラス面もあるので、縮小して、形を変えて実行できないか」との意見もあります。学校でも協議を行い、年間計画どおり「9月27日（日）に、安全対策を行いながら、内容を検討して体育大会を行う」ことに決定しました。保護者の皆様には、後日、プリントにて詳細をお知らせします。文化祭についても今後の状況を見ながら、例年とは違った形になるかもしれませんが、何とか実施したいと考えています。

学校行事を再開していく中で、「何とか修学旅行・集団宿泊学習に行かせてやりたい、行きたい。」という保護者・生徒のねがいに加え旅行業者の取組みで、今のところ、当初の予定とは少し違った形も取り入れながら、修学旅行・集団宿泊学習を実施する予定です。（新型コロナウイルス感染拡大の状況によっては、変更もあり得ます。）夏休みも残すところ、10日ほど、9/1、二学期の始業式に、スムーズなスタートが切れるように、生活のリズムを整え、健康に注意し、学習の補充、課題をやり遂げ、準備してください。

2学期、始業式に皆さんの元気な笑顔と出会えることを期待しています。

今一度、人権について考えよう！



人権とは、「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」あるいは「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持っている権利」、だれにとっても大切なもの、日常の思いやりの心によって守られなければならないものです。

人種、性別、宗教、年齢、貧富、病気、同和問題等、人権問題を解決するためには、私たち一人一人が、「人権は自分自身の生活に深く関わる自らの課題である」という認識を持ち、それに対する理解を深めることが必要です。

このため、鹿児島県では8月を「人権同和問題啓発強調月間」と定め、この期間中に各種の啓発活動を集中的に実施しています。

人権週間



「本年度奉仕作業について」

令和元年度、体育館、校庭工事が終了し、本年度は、体育大会を本校校庭で実施する予定です。

それに備え、学校敷地内の清掃・整備作業を計画しています。詳細は、別紙プリント（7/17）にて、配布しております。

ご確認の上、ご協力をよろしくお願いいたします。

日時：令和2年8月29日（土）8：00～

場所：龍南中学校 グランド

※ 作業用具・飲み物等は、ご持参下さい。

※ コロナ感染症・熱中症には十分注意され

十分な間隔・適宜休憩をおとりください。



こまめに水分補給

～ 忘れてはならない日 ～

6/23, 8/6, 8/9, 8/15, 12/25, 皆さんは、この日が何の日か分かりますか？

6/23, 全国で沖縄だけこの日は公休日、おびたしい数の住民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられた沖縄で、組織的な戦闘が終わった日とされ、犠牲になった人たちに祈りをささげる日。

8/6, 1945年8月6日午前8時15分、米軍のB29爆撃機「エノラ・ゲイ」が、広島市上空で世界初の原子爆弾「リトルボーイ」を投下した。市街は壊滅し約14万人の死者を出した。

8/9, 1945年8月9日午前11時ごろ、米軍のB29爆撃機「ボックスカー」がプルトニウム原爆「ファットマン」を投下し、長崎市松山町の500m上空で爆発した。約7万4千人の市民が死亡、約7万5千人が重軽傷を負った。

8/15, 1945年8月14日、政府はポツダム宣言を受諾し、翌15日の正午、昭和天皇による玉音放送によって日本が無条件降伏したことが国民に伝えられた。これにより第二次世界大戦が終結した。内務省の発表によれば、戦死者は約212万人、空襲による死者は約24万人だった。1982年4月の閣議決定により「戦歿者を追悼し平和を祈念する日」となった。

12/25, 第二次世界大戦後、北緯30度以南の南西諸島は日本から行政分離され、沖縄、奄美群島は米軍の統治下におかれまして。本土との航海が規制され物資が不足する中、1951年ごろから日本復帰運動が全国的な広がりをみせはじめ、奄美大島日本復帰協議会の泉芳朗議長らによる郡民一丸となった署名・抵抗運動や、本土在住の奄美出身者たちによる陳情活動などにより、1953年12月25日、奄美群島は日本復帰を果たしました。

夏休み中、いろんなイベント行事が新型コロナウイルス感染拡大防止のために、中止や延期、例年と異なる型で実施されました。そんな中、戦争・平和について考えさせられる行事、多くの報道がありました。

中学生の皆さんが、しっかりと「平和・戦争」について学び、自分なりの意見を持つことが大切です。そして、純粋な心で、どのように感じ、これからどのように行動していくべきか、考えてみましょう。

今年、広島市で行われた広島市原爆死没者慰霊式、長崎平和祈念式典でのちかい、宣言文です。

あなたはどんな風に感じますか。

～ 令和2年度 広島「平和へのちかい」 ～

「75年は草木も生えぬ」と言われた広島町。

75年がたった今、広島町は、人々の活気に満ちあふれ、緑豊かな町になりました。

この町で、家族で笑い合い、友達と学校に行き、公園で遊ぶ。

気持ちよく明日を迎え、さまざまな人と会う。

当たり前前の日常が広島町には広がっています。

しかし、今年の春は違いました。

当たり前だと思っていた日常は、ウイルスの脅威によって奪われたのです。

当たり前前の日常は、決して当たり前ではないことに気付かされました。

そして今、私たちはそれがどれほど幸せかを感じています。

75年前、一緒に笑い大切な人と過ごす日常が、奪われました。

昭和20年（1945年）8月6日午前8時15分。

目がくらむまぶしい光。耳にこびりつく大きな音。

人間が人間の姿を失い、無残に焼け死んでいく。

町を包む魚が腐ったような何とも言い難い悪臭。

血に染まった無残な光景の広島を、原子爆弾はつくったのです。

「あのようなことは二度と起きてはならない」

広島町を復興させた被爆者の力強い言葉は、私たちの心にずっと生き続けます。

人間の手によって作られた核兵器をなくすのに必要なのは、私たち人間の意思です。

私たちの未来に、核兵器は必要ありません。

私たちは、互いに認め合う優しい心を持ち続けます。

私たちは、相手の思いに寄り添い、笑顔で暮らせる平和な未来を築きます。

被爆地広島で育つ私たちは、当時の人々が諦めずつないでくださった希望を未来へとつないでいきます。

令和2年（2020年）8月6日 子ども代表 広島市立安北小学校6年 長倉 菜摘
広島市立矢野南小学校6年 大森 駿佑



～ 令和2元年度 長崎平和宣言 ～

私たちのまちに原子爆弾が襲いかかったあの日から、ちょうど 75年。4分の3世紀がたった今も、私たちは「核兵器のある世界」に暮らしています。どうして私たち人間は、核兵器を未だに無くすことができないのでしょうか。人の命を無残に奪い、人間らしく死ぬことも許さず、放射能による苦しみを一生涯背負わせ続ける、このむごい兵器を捨て去ることができないのでしょうか。

75年前の8月9日、原爆によって妻子を亡くし、その悲しみと平和への思いを音楽を通じて伝え続けた作曲家・木野普見雄さんは、手記にこう綴っています。私の胸深く刻みつけられたあの日の原子雲の赤黒い拡がりの中に繰り展げられた惨劇、ベロベロに焼けただれた火達磨の形相や、炭素のように黒焦げとなり、丸太のようにゴロゴロと瓦礫の中に転がっていた数知れぬ屍体、髪はじりじりに焼け、うつろな瞳でさまよう女、そうした様々な幻影は、毎年めぐりくる八月九日ともなれば生々しく脳裡に蘇ってくる。被爆者は、この地獄のような体験を、二度とほかの誰にもさせてはならないと、必死で原子雲の下で何があったのかを伝えてきました。



しかし、核兵器の本当の恐ろしさはまだ十分に世界に伝わってはいません。新型コロナウイルス感染症が自分の周囲で広がり始めるまで、私たちがその怖さに気づかなかったように、もし核兵器が使われてしまうまで、人類がその脅威に気づかなかったとしたら、取り返しのつかないことになってしまいます。

今年は、核不拡散条約（NPT）の発効から 50 年の節目にあたります。この条約は、「核保有国をこれ以上増やさないこと」「核軍縮に誠実に努力すること」を約束した、人類にとってとても大切な取り決めです。しかしここ数年、中距離核戦力（INF）全廃条約を破棄してしまうなど、核保有国の間に核軍縮のための約束を反故にする動きが強まっています。それだけでなく、新しい高性能の核兵器や、使いやすい小型核兵器の開発と配備も進められています。その結果、核兵器が使用される脅威が現実のものとなっているのです。“残り 100 秒”。地球滅亡までの時間を示す「終末時計」が今年、これまでで最短の時間を指していることが、こうした危機を象徴しています。3年前に国連で採択された核兵器禁止条約は「核兵器をなくすべきだ」という人類の意思を明確にした条約です。核保有国や核の傘の下にいる国々の中には、この条約を



つくるのはまだ早すぎるという声があります。そうではありません。核軍縮があまりにも遅すぎるのです。被爆から 75 年、国連創設から 75 年という節目を迎えた今こそ、核兵器廃絶は、人類が自らに課した約束“国連総会決議第一号”であることを、私たちは思い出すべきです。

昨年、長崎を訪問されたローマ教皇は、二つの“鍵”となる言葉を述べられました。一つは「核兵器から解放された平和な世界を実現するためには、すべての人の参加が必要です」という言葉。もう一つは「今、拡大しつつある相互不信の流れを壊さなくてはなりません」という言葉です。

世界の皆さんに呼びかけます。平和のために私たちが参加する方法は無数にあります。今年、新型コロナウイルスに挑み続ける医療関係者に、多くの人が拍手を送りました。被爆から 75 年がたつ今日まで、体と心の痛みに耐えながら、つらい体験を語り、世界の人たちのために警告を発し続けてきた被爆者に、同じように、心からの敬意と感謝を込めて拍手を送りましょう。この拍手を送るという、わずか 10 秒ほどの行為によっても平和の輪は広がります。今日、大テントの中に掲げられている高校生たちの書にも、平和への願いが表現されています。折り鶴を折るという小さな行為で、平和への思いを伝えることもできます。確信を持って、たゆむことなく、「平和の文化」を市民社会に根づかせていきましょう。

若い世代の皆さん。新型コロナウイルス感染症、地球温暖化、核兵器の問題に共通するのは、地球に住む私たちみんなが“当事者”だということです。あなたが住む未来の地球に核兵器は必要ですか。核兵器のない世界へと続く道を共に切り開き、そして一緒に歩いていきましょう。

世界各国の指導者に訴えます。「相互不信」の流れを壊し、対話による「信頼」の構築をめざしてください。今こそ、「分断」ではなく「連帯」に向けた行動を選択してください。来年開かれる予定のNPT再検討会議で、核超大国である米口の核兵器削減など、実効性のある核軍縮の道筋を示すことを求めます。日本政府と国会議員に訴えます。核兵器の怖さを体験した国として、一日も早く核兵器禁止条約の署名・批准を実現するとともに、北東アジア非核兵器地帯の構築を検討してください。「戦争をしない」という決意を込めた日本国憲法の平和の理念を永久に堅持してください。そして、今なお原爆の後障害に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、未だ被爆者と認められていない被爆体験者に対する救済を求めます。東日本大震災から9年が経過しました。長崎は放射能の脅威を体験したまちとして、復興に向け奮闘されている福島の皆さんを応援します。

新型コロナウイルスのために、心ならずも今日この式典に参列できなかった皆様とともに、原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、長崎は、広島、沖縄、そして戦争で多くの命を失った体験を持つまちや平和を求めるすべての人々と連帯して、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くし続けることを、ここに宣言します。



2020 年（令和2年）8月9日 長崎市長 田上 富久